

トピックス 清新鶴の会 25周年を祝う

江戸川区・清新鶴の会（指導；露澤徹師範・代表；茶木中子師範）は創立25周年を祝う祝賀会（実行委員長・露澤良子師範）を6月12日（日）午後1時から、船堀タワーホール平安の間でほぼ全員の32名の参加を得て盛大に開催しました。

25年の歴史を振り返り、また、露澤先生の模範演技、会員有志による歌唱と日本舞踊、さらには全員での合唱や踊りも交えて、にぎやかな会となりました。会員の山田豊師範ご提供の写真でその様子の一部をご紹介します。



第3期太極拳まるごと勉強会終了

昨年4月から月1回開催してきました「第3期・太極拳まるごと勉強会」は6月15日に第15回目の講座をもって無事終了いたしました。

5月の講座では、初めての試みとして、すでに終講された方々などにも声をかけて、各種、各派の太極拳を、また套路、競技、実戦の比較などを、ビデオで検証する特別講座を開催しましたところ、大変わかりやすかったとご好評をいただきました。



今回は夜間コースでしたが、平日の午前中のコースで来年4月から第4期を予定しています。

また、第3期終了の方、ならびに、第1期、第2期に参加された方々、また中国のよろもろにご関心のある方々を対象に、10月から「中国歴史文化なんでも勉強会」（仮称）を計画中です。

閑人閑話 「世界一貧しい大統領の名言」の続き

雲の手通信の5月号のこのコラムで掲載した「世界一貧しい大統領の名言」は、時節柄たいへん好評をいただきましたので、その続きを書かせていただきます。

時節柄というのは、舛添東京都知事にとってはたいへん不運なタイミングだったのですが、彼の外遊費用、公用車の使い方、政治資金の使い方などについてのニュースが大きく取り上げられてきた折であり、どうしても、ムヒカ氏【右写真、愛車のフォルクスワーゲンとともに】の志しの高さや清貧ぶりと比較されてしまったということです。



その後、週刊誌などでも、肉親との金銭問題の諍いや、母親介護のウソなどまで、あれこれと報じられ、6月に入っても、都議会でもさらに厳しい追及を受けて、ついには辞任に追い込まれてし

まいりました。疑惑は解明されぬままの後味の悪い幕切れとなりました。

話をホセ・ムヒカ氏の名言に戻します。最近読んだ『ホセ・ムヒカの言葉』（双葉社・佐藤美由紀著）から、より正確な文章で、彼の言わんとすることをご紹介してみたいと思います。

『ドイツ人が一所帯で持つクルマと同じ数のクルマをインド人が持てば、この惑星はどうなるのでしょうか。息をするための酸素がどれほど残るのでしょうか。【注 クルマ保有率；ドイツ 1000 人当たり 572 台（2010 年）、インド 1000 人当たり 18 台（2009 年）】……西洋の富裕社会が持つ傲慢な消費を、世界の 70 億～80 億の人ができると思いませんか。そんな原料がこの地球にあるのでしょうか。可能ですか。……なぜ私たちはこのような社会を作ってしまったのですか。マーケット社会の子供、資本主義の子供たち、つまり私たちが、間違いなくこの無限の消費と発展を求める社会を作ってきたのです。マーケット経済がマーケット社会を作り、このグローバリゼーションが世界のあちこちまで原料を探し求める社会にしたのではないのでしょうか。わたしたちがグローバリゼーションをコントロールしていますか。グローバリゼーションが私たちがコントロールしているのではないのでしょうか。……われわれの前に立つ巨大な危機問題は、環境問題ではありません。政治的な危機問題なのです。現代にいたっては、人類が作ったこの大きな勢力をコントロール仕切れていません。逆に、人類がこの消費社会にコントロールされているのです。』

『私が思う“貧しい人”とは、限りない欲を持ち、いくらあっても満足しない人のことだ。でも私は少しのモノで満足して生きている。質素なだけで、貧しくはない。』

『お金があまりに好きな人達は、政治の世界から出て行ってもらう必要があります。』

いかがでしょうか、世界の現状に対する鋭い、そして本質的な洞察はたいしたものです。繰り返しになりますが、私たちは、超消費社会の中に放り込まれていて、際限なく欲望を刺激され、次から次へと何かを求め続けさせられているのです。その不条理さと危険性にそろそろ気づくべき段階に来ているのではないのでしょうか。

ふたたび、老子の言葉ですが、『足るを知れば辱められず、止まるを知れば危うからず』『足るを知るものは富む』です。

なお、舛添問題についての私の思いを短歌欄（P 4）でご紹介しました。

さこうべん
左顧右眄

『第 18 話 肥大化する欲望の正体を探る』

太極拳に絡んでいろいろなことを勉強してきました。その中には、いわゆる心身の制御にかかわる経絡理論や東洋医学、あるいは西洋医学で言う自律神経の働き、さらには儒教道教佛教の思想などなど多岐にわたりました。この中でこころとからだがまさに表裏一体である、つまり「心身一如」であることも学んできました。今回はこころの中心にどっかりと座っている「欲望」と言うものの正体について勉強してみたいと思います。

この内容は、小生の勉強会、「太極拳なんでも勉強会」、「第 3 期太極拳まるごと勉強会」などで、過去取り上げてきたものですが、それをさらに補強したものを、この「左顧右眄」欄の新テーマとして、これから 7～8 回に分けてお届けいたします。

第 1 章 欲望とは何か

「欲望」とは「何かを得たいとすること、またその心」と辞書には載っています。英語では「Desire」とか、「Greed」です。前者は「欲望」のほか「願望」とか「希求」とかプラスイメージの意味も含んでいますが、後者の方がいわゆるマイナスイメージの「食欲」を意味しているようです。

仏教ではこれを「煩惱」と言い、それをまた三毒（食欲・瞋恚・愚痴）として戒めてもいます。お釈迦さまは人間の一生はひっきょう“生老病苦”であり、したがって●執着するな●すべての絆を断ち切れ●「わがものという思い」を去れ●この世にも、あの世にもとらわれるな、と説かれてお

られます。(原始經典スッタニパータ・ダンマパダより)

しかしながら、そうはいかないのが俗世、俗人です。お釈迦様の御教えにかかわらず、21世紀のいまに至るもご承知のとおりです。欲望はますます肥大化し、複雑化し、個人や社会を悩ませて

います。本来的には「欲望」はまさに生存の、行動のエネルギーの根源ですが、一方、ヒトはまた欲望によってさまざまな葛藤を負い、苦しみ、争い、また絶望し、破滅に至ることも稀ではありません。古今東西みな同じですね。個人だけではありません。ヒトによって構成されるあらゆるグループ、会社、結社、宗教団体、政治団体、文化団体、民族、国家みな同じです。

手持ちの『類語大辞典』で「欲望」の項目を引いてみますと、「欲望」をさらに分類した言葉が列記されています。「食欲」「性欲」、さらに、「物欲」「知識欲」「名誉欲」「出世欲」「征服欲」もあり「私欲」「我欲」もあります。

しかし、基本的には、動物とは、すべて外部から何かを取り込んで自分の生命維持活動のエネルギーとして用いて命をつなげる、ならびに子孫を残そうとする、存在です。

この二つが、つまり「**食欲**」と「**性欲** (本来的には、「生殖欲」あるいは「種の保存欲」)」こそが、動物すべてに共通する生存の目的であり根源的な欲求であるといえます。

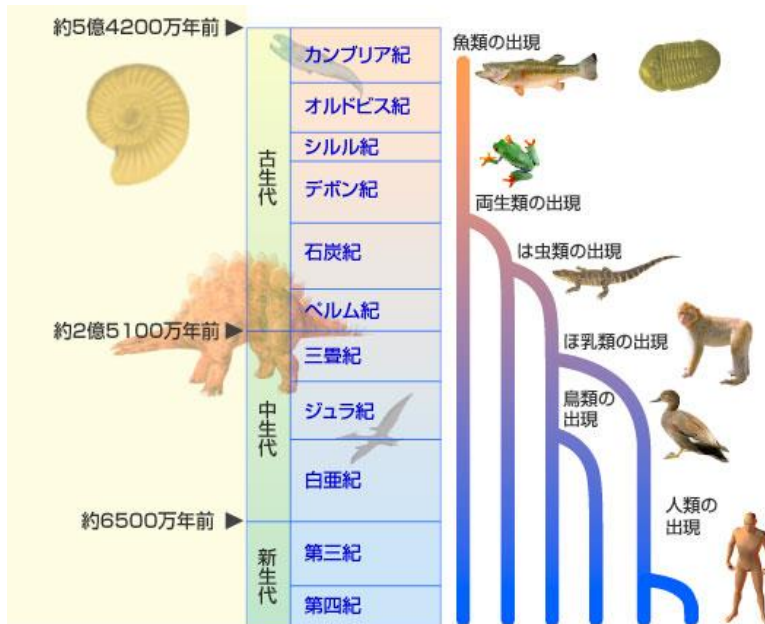
人類はあまりにも、体の機能も進化し、大脳も発達しすぎて、「欲望」も肥大化し、複雑化しているのではないだろうか、と言う観点から、欲望の正体を解き明かす試みをしてみました。

第2章 地球の歴史と動物の進化の歴史

先ず、順番として、地球の誕生から生命の誕生、そして動物の進化について、簡単におさらいをしてみたいと思います。地球の誕生から人類誕生までの地球史は以下のとおりです。

- 46億年前 地球誕生
- 40億年前 原始生命誕生
- 6～10億年前 多細胞生物誕生
- 5億年前 脊椎動物誕生
- 1.8億年前 大陸の分離
- 50万年前 北京原人誕生
- 20万年前 ホモサピエンス誕生

また、右の図でお分かりいただけるように、約5億年前に魚類が出現し、それから様々な動物が進化の過程で出現してきますが、地球上では人類の誕生は本当に“ごく最近の”ことなのです。次号ではその進化の過程を少し詳しくたどってみたいと思います。



アーカイブス「雲の手通信」 (再掲・昔のコラム)

健康妄語録 細菌は大切なお友達 (2008年1月第42号)

部屋の中に抗菌スプレーを噴射するとか、抗菌剤入り靴下にこだわるとか、抗菌シートで拭かないと便器に座れないとか、最近の清潔志向にはちょっと目に余るものがあります。抗菌グッズはたいへんな成長市場になっているようですが、果たして国民の健康のためになっているのかという疑問がいろいろな識者から出ております。

つまり、このような抗菌グッズの乱用で、当の細菌たちがどんどんと耐性菌に変容してしまう、つまり抗菌剤が無効化してしまう、ということによる危険性です。単細胞の細菌といえども私ども人間と同じ立派な生物であることを忘れてはいけません。彼らにも生存権があり知恵も力もあるのです。災いに遭えば自らより強い性質に変わるので。これは、抗生物質が次々と効かなくなっている、という深刻な現実とまったく同根の問題なのです。

ところで、私たちの体は100兆個もの細菌によって守られているそうです。常在菌と呼ぶそうですが、腸の中だけではなく、外部とつながるあらゆる粘膜に、また皮膚の表面にいて外部から侵入しようとする細菌とせめぎあって体を守る役割を果たしているのです。また、腸内には乳酸菌のような「善玉菌」も、大腸菌のような「悪玉菌」も共生しているのですが、悪玉菌の役割は彼らが居ることによって免疫細胞の活性化を助けていることだそうです。但し、体力が消耗したりするとたんに暴れ出すということもあるそうですが、とても玄妙な仕組みですね。

本来人間はこうした常在菌とも仲良く折り合って、また外から侵入してくる細菌には自らの免疫力を働かせて健康に生きる機能を備えているのですから、抗菌グッズのコマーシャルにはあまり踊らされないで、もうちょっとおおらかに、鈍感に、暮らしたいものだと思います。

このままだと人類が細菌によって壊滅的な被害を受けることになるとして、抗生物質や抗菌剤の使用を厳しく制限する動きが欧米諸国では起きているそうです。日本では薬害問題などと同様まだまだ動きが鈍いようですが本当に大丈夫なのでしょう。

ということから、WHOも2015年から「抗菌薬啓発週間」～抗生物質などの適正な使用、つまり使いすぎないようにする運動～を世界中で始めたということです。抗生物質は飲み薬だけではなく、塗り薬や点滴としても用いられていますし、また、人間に対してだけではなく、家畜や養殖魚などにも大量に用いられている現実があるからです。世界中で（ヒトや動物の体内ということだけではなく、土壌にも水の中にも）垂れ流されているこうした抗生物質が、どんどん耐性菌を増やしているという深刻な問題があつてのWHOの行動なのです。

蛇足ですが、細菌とウイルスの違いをご説明します。細菌は単細胞ですが、自己増殖能力を持つ微生物です。ウイルスは、自分自身では増殖することができないタンパク質と核酸からなる構造物で、必ず他の細胞を宿主として、そこから栄養をもらって増殖するだけだそうです。微生物か非生物かという議論もあるようです。細胞よりはるかに小さいものだそうです。と言ってもぴんときませんが、たとえば、ブドウ球菌（細菌）は直径約0.8~1.0 μm （マイクロメートル=1 $^{-6}$ M）、ノロウイルスは、直径約30nm（ナノメートル=1 $^{-9}$ M）とされています。

風邪にもインフルエンザにも抗生物質は効かないのです。休養と栄養補給が唯一の妙薬だそうです。それにもまして、細菌やウイルスに対する免疫力、抵抗力を強める日常生活、生活習慣こそが大事なことかと思えます。わかりやすく言えば、“めったに風邪をひかない人”になることです。

放をうたい星を詠む 舛添知事騒動を詠む

倫理なき弁明あざとく聞くほどにわが胸中もささくれてくる
マスコミの映像つぶて紙つぶて水に落ちたる犬を打つごと

責められて次第に性の面貌さが めんぼうに表れくるは哀しきものかな

肉親の予言はまさに的中す “遅かれ早かれいつか自滅す”
空々しいせこいあざとい見苦しいふと紫陽花の白が眩しい



【清新町の紫陽花・6.17 撮影】